

啓示された言葉

祭壇の言葉とその御国

□ 私たちは記憶する限りにおいて自由である □

□ 蛇

御国の兄弟姉妹

言葉の御名とその御国において、二人またはそれ以上が集まり、共に記念を始めます。

私は自分のこと、自分の歴史、自分の状況についてあなたに語るために来たものではありません。また、私の意見、信念、利害、個人的な経験から生まれた真理をあなたに押し付けるために来たのでもありません。

私は、すべてのものの源である真理についてあなたに語るために来ました。見えざるものの中の言葉、あらゆる形を生み出す起源についてです。

私は署名もなく、顔もなくあなたの前に現れます。自分を隠したいからではなく、書いている人物をこれらの言葉の中心に据えようとは求めていないからです。私はあなたの承認、拍手、服従、お金を求めていません。外側の何かをあなたから得る必要はなく、偽りの何かをあなたに差し出そうともしません。

言葉の御国には、真実のものは何一つ余分ではなく、本質的なものは何一つ欠けてはいません。

ここであなたは読むことになるでしょう。しかし、あなたはただ読むためだけに来たものではありません。

あなたは知識を蓄え、答えを暗記し、まだ自分の中で理解し認識していない言葉を繰り返すために来たものではありません。なぜなら、体現していない真理を繰り返すことは、その象徴を通過することなく、その形を口にすることだからです。

この場所はテキストという見える形をとっていますが、その見えない意味は普通の書物のそれではありません。

ここは祭壇です。なぜなら、この場所で私たちは集い、自分たちではないものを内側で犠牲にするからです。

祭壇は紙でも、画面でも、書かれた言葉でもありません。祭壇は、二人か三人が言葉の名において集まり、共に臨在に入り、想起を始めるときに現れます。

その名において集まることは、単に言葉を発し、称号を唱え、信念を宣言することを意味しません。名とは、名指されるものの臨在です。言葉の名において集まることは、人物とその自我の利害を超えて、真理に仕える備えをすることです。

その備えが真実であるとき、私たちが集う場所は祭壇となり、私たちの間で御国が現れ始めます。

ここで私は、私が言うからあなたが受け入れなければならない何かを教えるために来たのではありません。私はあなたに問いかけ、あなたと共に観想し、見えないものが想起されるための象徴をあなたに差し出すために来ました。

書かれた言葉は、言葉そのものではありません。

言葉は見える形です。それらが真理に仕えるとき、象徴となります。見えない言葉と、それを認識できる意識との間の橋です。

橋と目的地を混同してはなりません。

言葉の形に留まってはなりません。それらを通過しなさい。それらが指し示すものを観想し、自分の中で、それらが真理、一致、自由、命を生み出すかどうかを認識しなさい。

私たちは、自分たちが本当は誰であることを想起することから始めます。

私たちは、肉の前に、自我の前に、名前、歴史、状況、傷、信念、利害を持つ人物の前に、自分たちが誰であったかを想起します。

その「以前」は、単に時間の中の以前の瞬間を指すものではありません。それは本質において先なるものを指します。私たちがまとうすべての形の下に留まり、変わりうるすべてのものを超えて存在するものを指します。

あなたの体は変わります。

あなたの歴史は変わります。

あなたの思考、欲望、信念は変わります。

今日あなたが体現している人物もまた変わります。

しかし、それらすべての変化を観察できるものは何でしょうか？

あらゆる名前の前に、あなたは誰ですか？

あらゆる個人的な記憶の前に、あなたは誰ですか？

あなたが自分を認識することを学んできたあらゆる形の前に、あなたは誰ですか？

これが扉を開く問いです。

この祭壇は開かれたままであり、忘れられた言葉が想起される必要がある限り、想起されたものが認識される必要がある限り、認識されたものが私たちの言葉、決断、行いを通して体現される必要がある限り、明かされ続けるでしょう。

なぜなら、御国は単に名指すことによって打ち立てられるわけではないからです。

まず見えざるものの中で想起され、次に意識の中で認識され、最後に形の中で体現されな

ければなりません。御国は私たちの内側で始まりますが、私たちの人生の実を通して見えるものとなります。

まことに、あなたがたに言います。天の御国は明かされるでしょう。それは一部の者のものとなるためではなく、臨在に入る備えをするすべての者が理解し、把握し、想起し、認識できるようになるためです。

ここで名指されるものは何一つ、あなた自身の認識を置き換える教義となってはなりません。これらの言葉が神聖に見えるからというだけで受け入れてはなりません。あなたが学んできたことに反するからというだけで拒んではなりません。

沈黙の中でそれらを観想しなさい。

恐れずにそれらに問いかけなさい。

象徴としてそれらを通過しなさい。

その実によってそれらを認識しなさい。

真理は観想されることを恐れません。なぜなら、真理であり続けるために盲目的な服従を必要としないからです。

ここで明かされることは、個人的な意見、私的な信念、あるいは人物が他の人物と区別されるための考えであることを意図していません。もしそれが目的なら、私は自分の利害からあなたに語り、これらの言葉の上に自分の名を掲げ、この祭壇を数多くある書物の一つにしてしまうでしょう。

しかし、これらの言葉が署名も顔も持たないということは、媒介なしに現れるという意味ではありません。それらは手によって書かれ、意識を通り、人間の形をとります。しかし、それらを伝える形は、それが仕えようとしている真理の主人であると宣言することはできません。

器は水ではありません。

象徴は、それが象徴するものではありません。

使者はメッセージの起源ではありません。

私もまた真理から出た者ですから、真理を我が物とすることはできません。言葉が私に名指し、理解し、存在することを可能にしているのですから、私が言葉の作者であると宣言することはできません。

真理は私だけのものでも、あなただけのものでもありません。

私たちは真理のものです。

だからこそ、私はあなたに私の人物を信じるよう求めません。沈黙に入り、これらの言葉を観想し、あなた自身の中で、あなたの中にも生きているものを認識するよう、あなたを

招きます。

ここに私が記すものは、言葉の記憶から出て、その御名において捧げられる。しかし、それぞれの言葉は、それが明らかにすることによって、またそれが生み出す実によって、真理との対応を示さねばならない。

もしある言葉が、一人を他の者たちの上に立てるために兄弟たちを分かたなら、それは御国に仕えない。

もしある言葉が、恐れや罪悪感や服従によって鎖につながら、それは自由に仕えない。

もしある言葉が、理解も認識もなしに受け入れられることを求めるなら、それはまだ橋とはなっていない。

真実の言葉は、あなたを支配しようとはしない。

それはあなたを目覚めさせようとする。

それはあなたの良心を代わりにしようとは企てない。

それはそれを臨在へと戻そうとする。

それはあなたが他人の真理を繰り返すことを望まない。

それはあなた自身がそこから出てきた真理を、あなたが記憶することを望む。

ここに立ち上がる言葉は、父の剣であり、言葉の中で鍛えられ、火の中で握られる。

しかし、この剣は肉に対してでも、どの兄弟に対しても立ち上がらない。

その刃は、真理と偽り、本質的なものと見せかけのもの、そして私たちがまさに受肉しているだけのものと、私たちが在るものを分かた。

それを握る火は、生命を滅ぼすために来るのではない。それは偽りを焼き尽くし、眠ったままのものを変容させ、忘れられていたものに光を戻すために来る。

剣は象徴を開く。

火はその起源を明らかにする。

臨在は見つめる。

記憶は知る。

認識は在る。

そして、私たちが知ること、私たちが在ること、私たちが行うことが再び一つとなるととき、言葉は肉となり、その御国は私たちの間で現れ始める。

忘れられたものを思い出すこと

あなたが誰であることを明らかにするために、どこへ向かうべきか？外か、内か？
あなたが本当に誰であることを明らかにするためには、内側へ赴かなければならない。

これは、すべての教え、書物、大学、科学、宗教に価値がないという意味ではない。たとえ現代の世界ではすべてが腐敗し、転倒しているため、それらの大半は価値を欠いているとしても。外側で見出すものはすべて、知識、問い、地図、象徴を私たちに与え得る。教師は扉を指し示すことができる。書物は言葉を届けることができる。伝統は何世紀にもわたって象徴を保存することができる。

しかし、誰も私たちに代わって扉を渡ることはできない。

外側のものは真理を指し示すことができるが、その真理の認識は、あなたの内側でのみ起こり得る。

外側の世界を完全に否定することは、新たな分離を築くことになるだろう。外側と内側は敵ではない。外側のものは内側のものの鏡、象徴となり得る。しかし、鏡はあなたに代わって見ることはできず、象徴はあなたの臨在なしには渡り抜かれ得ない。

だからこそ、あなたが誰であることを最終的に告げてくれる誰かを外側に求める必要はない。

あなた自身が、自分を見出すために読むことを学ばねばならない書物なのである。

しかし、その書物は単にあなたの人物の物語ではない。その最も深い頁には、あなたの名前、職業、所有物、傷、過去の出来事は記されていない。それらはすべて、あなたの存在の目に見える物語に属している。

あなたが読むべき書物とは、その物語が現れる意識である。

それを読むとは、内なる対話に入ることを意味する。学んだ答えなしに問い、急いで結論を下さずに熟考し、人物の騒音が隠していたものを沈黙が明らかにすることを許すことである。

それは、見出したいと願う答えを自分の内側で作り出すことではない。真実ではない答えを一つずつ取り除き、残るものを認識できる状態になることである。

なぜなら、内側に現れるすべてが言葉に由来するわけではないからである。私たちの内側では、恐れ、欲望、記憶、傷、習慣、そして自己保存への自我の欲求もまた語るものである。

内側に入るだけでは十分ではない。

私たちはまた、誰が私たちの内側で語っているのかを見分けることを学ばねばならない。

想起することと認識すること

想起することは、私たちの個人的な記憶から失われた出来事を取り戻すことを意味しない。また、他者より優位に立つための秘密の知識を獲得することも意味しない。

想起とは、借り物ではない知恵の目覚めである。

以前は単なる言葉、観念、信念としてしか知らなかったものを、生きた真理として発見することである。

認識することは、さらに深い。

認識することは、想起したものの中に自分自身を見出すことを意味する。真理を何か疎遠なものとして眺めるのをやめ、自分が何であるかの不可分な一部としてそれを体現し始めることを意味する。

ゆえに：

想起するとき、あなたは知る。
認識するとき、あなたは在る。

一体性について多くの言葉を学びながら、分離から生き続けることはできる。その場合、あなたは知識を蓄積したが、まだ想起してはいない。

真理を知的に理解しながら、それでも自分の決断によってそれを否定することはできる。その場合、あなたは想起し始めたが、まだそれを体現してはいない。

認識は、あなたが知ること、あなたが在ること、あなたが行うことが対応関係に入るときに成就する。

兄弟姉妹よ、私たちは共に、内なる父の御国へ帰ろう。

この帰還は、別の場所への移動でも、世界からの逃避でもない。遠い天国に到達するために地を捨てることではない。帰還することは、自分を分離した存在として認識し始めたときに人物が忘れた一体性の状態を想起することである。

あなたと私は、言葉の御名において集い、共に想起へと入る。そして、私たちの関係が分離に仕えることをやめ、真理に仕え始めるとき、私たちの間に御国が現れる。

私は、あなたの本質に異質なものを何も教えないつもりである。私たちは共に、忘れられ、すべての者が体現するよう召されているものを想起するのである：

肉となった言葉。

言葉を肉とすることは、目に見えない真理が、私たちの言葉、決断、関係、業において目に見える形を見出すことを許すことを意味する。

想起の必要性

想起は、物事の表面を眺めるだけではもはや満足しなくなったときに始まる。

それは、形の目に見える外観を超えて真理を見出す必要性から生じる。それは、人物がそれだけでは答えられない問いを立て始めるときに生じる：

私は本当は誰なのか？

命はどこから来るのか？

なぜこれほど多くの苦しみが存在するのか？

なぜ人間は自分の兄弟から分離するのか？

私が知るすべてが変わるとき、何が残るのか？

全体性の中での私の存在の意味は何か？

この必要性は、単なる好奇心から生まれるのではない。それは、単に私たちの個別の自己を安心させたり利益を与えたりするためだけの答えを求めるのをやめるときに現れる。

想起は、私たちの問いが、私たちの人物とその状況よりも大きくなるときに始まる。

しかし、苦しみの起源を探求することは、苦しみを抱える者を非難することを意味しない。すべての不幸が、それを被る者の思考によって作られるわけではなく、すべての傷が内なる欠如の結果であるわけでもない。

真の問いは、苦しむ者を非難しない。

それは、苦しみに対して私たちが何を体現すべきかを問うのである。無関心か、それとも慈悲か。断罪か、それとも理解か。分離か、それとも一体性か。

真理は、兄弟の痛みを利用して、理解したと信じる者を誇張することはない。

真理は、その痛みはどう応答するかによって認識されるのである。

人物と自我

人物の以前にあるものを、私たちはどうやって想起し始めることができるのか？

人物にのみ仕える心を沈黙させることによってである。

しかし、その前に、ペルソナとエゴとは何かを理解しなければならない。

ペルソナとは、私たちが目に見える世界で行動するためのアイデンティティである。それには名前、身体、歴史、責任、関係、そして機能がある。

ペルソナは、破壊されるべき嘘ではない。それは世界に住まうために必要な形である。

誤りは、それが一つの形にすぎないことを忘れ、それが私たちの全体であると信じ込むときに始まる。

エゴとは、その形との排他的な同一化である。

それは、ペルソナを万物の中心に置き、現実をただ一つの問いからのみ眺める内なる動きである：

「これは私にとって何を意味するのか？」

身体を休めるために眠ることは、利己主義ではない。

健康を保つために食べることは、利己主義ではない。

身体を労り、強くすることは、利己主義ではない。

生活を尊厳をもって支えるために働くことは、利己主義ではない。

楽しむこと、創造すること、休むことも、利己主義ではない。

肉の欲求は、それ自体としては偽りではない。身体は言葉の敵ではなく、言葉が受肉し得る形の一つである。

問題は、すべてのものが自己の排他的な奉仕に還元されるときに現れる：

私の休息。

私の身体。

私の金。

私の承認。

私の安全。

私の好み。

私の意見。

私の真理。

私の救い。

そのとき、心はペルソナの限界の中に閉じ込められる。すべてが、その過去、欲望、信念、利害、義務、恐れ、そして傷から解釈される。

その状態では、私たちは物事をあるがままに見ていない。

私たちが見るのは、それらが私たちにとって何を表しているかである。

自己の周りを絶え間なく巡るその動きこそが、エゴの雑音である。

沈黙

どうすれば心を沈黙に置くことができるのか？

思考を破壊することによってではなく、それを一時的にペルソナへの従属から解放することによってである。

心を沈黙させることは、考えることをやめることでも、学んだことを永久的に忘れることでも、私たちの責任を放棄することでもない。また、身体、仕事、家族、あるいは私たちが引き受けた約束を顧みないことを意味するのでもない。

沈黙は無責任を要求しない。

想起の行為の間、それはこう言うすべてのものの支配を一時的に停止することを意味する：

「私は□しなければならない」

「私は□が必要だ」

「私は□された」

「私は□と思う」

「私は□が欲しい」

「私は□が怖い」

心を沈黙させることは、特定の自己をすべての問いの中心に置くことをやめることを意味する。

しばらくの間、あなたの名前、歴史、意見、信念、利害、そしてあなた自身について想像していることを休ませなさい。

それらを破壊する必要はない。

ただ、それらを支え続けるのをやめるだけでよい。

もはやペルソナを守り、その歴史を正当化する必要がなくなるとき、雑音は止まり始める。心はもっぱらあなたの周りを回ることをやめ、あなたをも含みながらも、あなたの中で終わらない何かのために利用可能になる。

そのとき、心はすべてのものの源である真理の奉仕に入る。

それは、見えないものにおける言葉の奉仕に入る。

空

ペルソナの雑音が静まる時、空が現れる。

空は、非存在でも、無意識でも、アイデンティティの喪失でもない。それは無効化された心でも、死んだ内面でもない。

空とは、利用可能性である。

それは、既知の答えでそれぞれの問いを満たすことをやめるときに現れる空間である。それは、ペルソナが新しい何かの誕生を妨げていた確信を取り除いたときに残る肥沃な土壌である。

器が満ちたままでいる限り、それは受け取ることができない。

心が自己で満ちたままでいる限り、それはすでに知っているものしか見いだせない。

空になることは、執着をやめることである。

それは、私たちの信念が観照され得るようにし、私たちの意見が問われ得るようにし、私たちの歴史がすべての答えを指図するのをやめることを許すことである。

空において、私たちはもはや、肉において経験したことによってのみ自分自身を認識する必要はない。だからこそ、心は本質において私たちが何であるかを想起し始めることができるのだ。

空は、あなたが何であるかを奪い去らない。

それは、あなたが混同していたものを取り除くのである。

臨在

沈黙から生まれた空において、最初の奇跡が起こる：

臨在。

臨在は単なる注意ではない。たとえ注意が私たちをその閾値まで導き得るとしても。

注意は、何かへと視線を向ける。

臨在はまた、誰が眺めているのか、どこから眺めているのか、そして観察者と観察されるものの間にどのような関係があるのかを観照する。

注意において、私はまだこう言うことができる：「私はあれを観察している」と。

臨在において、観察者と観察されるものが、一つの同じ意識の中に現れていることが啓示され始める。

臨在とは、その出会いを意識的に住まうことである。

それは、所有せずに観察し、防御を準備せずに聴き、すでに信じていたことを現実が確認するよう強制せずに観照することである。

臨在において、ペルソナは消えない。それは玉座を占めるのをやめるのである。

これこそが、ペルソナに死ぬことの意味である：身体、人格、あるいは生きるために必要なアイデンティティを破壊することではなく、それが私たちの全体であるという主張に終止符を打つことである。

ペルソナは存在し続けるが、今やそれは道具となる。

それはもはや、ただ自分自身を保つためだけに心を用いることはない。それは真理、統一、そして起源の奉仕に自らを置き始める：

言葉。

この状態において、私たちは、それを測ることができる尺度も、それを包み込むことができるラベルも持たない宝を、想起し、啓示し、認識するために利用可能となる。

私たちの思考は、もはや仕事、人間関係、義務、過去、あるいは個人的な自己の未来だけに限定されません。私たちは、自分たちに先立ち、自分たちを包み込み、自分たちを結びつけるものについても熟考し始めます。

そして、まさにここ、登場人物が王座を占めるのをやめるときに、私たちは意識とは何か、そしてそれを所有していると信じることと、私たち自身の存在がその内に現れていることを認識することの違いが何かを理解することができます。

意識

あなたが臨在に入るとき、意識は何か新しいものとして現れるわけではありません。

意識はすでにありました。

消え始めるのは、それを専ら登場人物とその自我に結びつけていた同一化です。

その瞬間まで、あなたはこう言います：

「私の意識」と。

ちょうどあなたがこう言うのと同じように：

「私の体」と。

「私の歴史」と。

「私の思考」と。

「私の記憶」と。

「私の人生」と。

しかし、臨在に入ると、根本的な違いが明らかにされます：体、歴史、思考、記憶は観察され得るのです。

それらのすべては、意識の内に現れます。

「私」と言う登場人物でさえ、熟視され得ます。

そして、もし登場人物が観察され得るなら、その登場人物は観察者の全体ではあり得ません。

意識は登場人物の内に現れるのではありません。

登場人物こそが意識の内に現れるのです。

これこそが、回復されなければならない逆転です。

私たちが臨在にいないとき、私たちは意識が自分たちのものであると信じます。私たちは、それが自分の体の中に閉じ込められており、自分のアイデンティティの限界で始まり終わると想像します。

私たちが臨在に入るとき、関係は逆転します：

私たちはもはや意識を登場人物の所有物として熟視しません。

私たちは登場人物を、意識の内に保持され観察される一つの形態として熟視します。

だからこそ、ここで「あなたの意識」について話すとき、私たちは登場人物の特定の視点によって限定された意識を名指すのです：その記憶、その歴史、その欲望、その傷、その信念、そしてその感覚を。

私たちが意識

を名指すとき、私たちは、あらゆる観察、あらゆる経験、あらゆる認識を可能にするものを語っています。

登場人物の意識は、特定の形態から現実を熟視します。

意識は、その中に閉じ込められることなく形態を熟視します。

二つの意識は存在しません。

存在するのは、異なる形態を通してそれ自身を経験している、一つの同じ意識です。

それぞれの形態は特定の視点を持ちますが、いかなる形態も、それに宿る意識の起源ではありません。

光と窓

それを理解するために、この象徴を熟視してください：

一つの同じ光が、多くの窓を通過します。

それぞれの窓は、異なる形、大きさ、色、位置を持っています。だからこそ、光はそれぞれの窓を通過するとき、異なった形で現れます。

しかし、窓は光を生み出しません。

それはただ、光が形態に入ることを許すだけです。

登場人物は窓です。

その記憶、信念、傷、欲望は、ガラスの色です。

個々の意識は、光がその形態を通過する特定の視点です。

そして、光は意識です。

窓が、光が自分に先立つことを忘れるとき、窓は自分自身がその起源であると信じ始めます。こう言います：

「これは私の光だ」と。

「私の光はあなたのものとは異なる」と。

「私の光は優れている」と。

「私の窓の外には光は存在しない」と。

そのとき、光に仕えるべきだった形態が、その場所を占めようと試みます。

窓は自らを源と宣言します。

登場人物は自らを起源と宣言します。

そして、自我を通して熟視される意識は、他のすべての形態に宿る意識から分離されているように見えます。

しかし、光は決して分離しませんでした。

分離したのは、それを熟視する形態でした。

臨在は窓を破壊しません。

それを透明にします。

個別性を排除したり、互いの違いを消し去ったりはしません。それぞれの形態が、全体から独立した分離した源であるという主張を取り除くのです。

そのとき、窓は光を所有したいと望むのをやめ、光に仕え始めます。

登場人物は自らを起源と宣言するのをやめ、言葉の器となることを始めます。

分離した意識

心が登場人物とその自我の奉仕にあるとき、意識は特定の視点に縮小されます。

すべては自己から、自己のために熟視されます：

これは私にとって何を意味するのか？

それは私にどのように利益をもたらすのか？

それは私にどのように害をもたらすのか？

私は何を得ることができるのか？

私は何を守らなければならないのか？

何が私のアイデンティティを脅かすのか？

意識は消え去ってはいませんが、その視界は登場人物の周りに収縮しています。

これを私たちは分離した意識と呼びます。

それは全体の意識とは異なる別の意識ではありません。それは、一つの形態と同一化し、その形態があたかも他のすべてから隔離されているかのように現実を熟視している、同じ意識です。

それは、自分自身の限界を熟視するとき、自分が作られている水を忘れる波のようなものです。

波は存在します。

それは特定の形を持ちます。

それは他の波から区別され得ます。

しかし、それは決して海から分離していませんでした。

同じように、それぞれの存在は、特定の経験、歴史、そして再現不可能な視点を持っています。統一はそれらの違いを排除しません。

統一は、いかなる違いも絶対的な分離を構成しないことを明らかにします。

登場人物は言います：

「私はただこの波だけだ」と。

臨在は明らかにします：

「私は波であるが、しかし私はすべての波の中に生きる水からも発している」と。

分離した意識は、創造によって課された罰ではありません。

それは対応の結果です。

もしあなたが専らその人物を体現し、その関心に心を仕えさせるなら、あなたはその人物の限界から知覚することになるでしょう。もしすべての問いがその人物の中から生まれ、すべての答えがその人物へと戻らなければならないなら、あなたはその見方に対応するものだけを観想できるにすぎません。

それは、真理があなたに否定されているからではありません。

それは、あなたが真理から分離したものと見なされる形から見ているからです。

あなたが専ら人物に心を仕えさせることをやめ、言葉に心を仕えさせるなら、意識はもはや自己に還元されなくなります。

そのとき、あなたの意識はもはや単に「あなたのもの」ではありません。

それは、考える能力、決断する能力、あるいは他者と自分を区別する能力を失うからではなく、あなたの人物の中に意識を閉じ込めようとした所有が消え去るからです。

あなたはあなたでなくなるのではありません。

あなたは、自分が単にその人物であるという信念をやめるのです。

一者と全体の意識

臨在にあることは、一者と全体の意識の認識を開きます。

しかし、この共有された意識は、私たち全員が同じ思考、記憶、感情、知覚を持つことを意味するものではありません。

それらの内容は、それぞれの形の個別の経験に属します。

意識の統一は画一性ではありません。

それは多くの存在を単一の人物に変えることも、各々を特異にするものを消し去ることもありません。

共有されるのは物語ではありません。

共有されるのは、あらゆる物語が現れ得る起源です。

共有されるのは思考ではありません。

共有されるのは、それを観察することを可能にする意識です。

共有されるのは形ではありません。

共有されるのは、あらゆる形を通して現れる生命です。

それゆえ、臨在にあることは、他者の記憶や思考に自動的にアクセスすることを意味しません。それは、他者をあなたから絶対的に分離した存在として観想することをやめることを意味します。

痛みは依然として特定の形の中で起こりますが、もはや完全に無関係なものとして観想されることはありません。

不正は他者に降りかかるかもしれませんが、統一された意識はこう答えることを妨げます：

「それは私に起こっていないから、私の問題ではない」と。

意識が人物の中に閉じ込められなくなるとき、他者の苦しみは私たちの責任の領域に入ってきます。

それは、私たちが彼の痛みを所有すべきだからではありません。

それは、私たちが、彼の中で傷つけられている生命が、私たちの中に宿る生命と同じ起源から発していることを認識し始めるからです。

分離した意識は問います：

「これは私と何の関係があるのか？」と。

統一された意識は問います：

「私たちの中で何が起きているのか？」と。

前者は人物を起源とし、目的地とします。

後者は言葉を起源とし、全体を目的地とします。

観察する者と観察されるもの

臨在において、観察する者と観察されるものは、絶対的に分離した現実として経験されることをやめます。

これは、両者が形において同一であることを意味するものではありません。

木を観想する者は、身体的に木になるものではありません。兄弟の苦しみを観想する者は、彼の体を占めることも、自動的に彼の記憶を受け取ることもありません。

区別は残ります。

消え去るのは、起源における分離です。

あなたが観察するものは、意識の中に現れます。あなたはそれを意識の外で観想することはできません。なぜなら、あらゆる形は知られるために意識に入る必要があるからです。

観察する者は意識の中に現れます。

観察されるものは意識の中に現れます。

そして観察という行為そのものが意識の中で起こります。

それゆえ、臨在において、観察する者と観察されるものは再会します。

形は外側に留まります。

その像は内側に現れます。

象徴が橋を架けます。

そして言葉は、不可視のものにおいてその意味を啓示します。

意識はその出会いの場です。

それは、可視のものと不可視のものが、混ざり合うことなく、また分離したまま留まることなく、再会し得る内なる祭壇です。

問いと答え

観察する者と観察されるものが意識において再会するように、問いと答えもまた、同じ啓示の運動に属しています。

問いは、意識が、その起源がまだ認識されていない形を観想するときに現れます。

答えは、もはや人物の関心に服従していない心が、象徴を通過し、観想するものの不可視の意味に到達するときに啓示されます。

問いは開きです。

答えは、開きが真実であるときに、入り得るものです。

それらは形において同一ではありませんが、同じ起源から発しています。

真実の問いは、その答えを製造しません。

それは受け取ります。

しかし、それは、開かれたままであり、真理が人物がすでに信じたいと望んでいたことを確認することを要求しないときにのみ、それを受け取ることができます。

それゆえ、空は臨在に先行します。

空がなければ、問いはすでに学ばれた答えで満たされています。

臨在がなければ、人物が探求を導きます。

意識がなければ、形は見られるかもしれませんが、その意味は認識され得ません。

そして識別がなければ、自我のいかなる欲望も啓示に偽装することができます。

意識が可能にすること

意識は私たちに何を可能にするのでしょうか？

意識は、観察し、理解し、把握し、識別し、見出すことを可能にします。

観察する

ことは、私たちの信念を即座に確認することを強制することなく、形を受け取ることです。

理解することは、その部分、その関係、その機能、その結果を認識することです。

把握する

ことは、それが属する全体から分離することなく、より大きな現実の中でそれを観想することです。

識別する

ことは、それがどの起源から発しているか、誰に仕えているか、どのような実を結ぶかを認識することです。

見出すとは、形を貫き、その象徴が内に含む見えざる真実を認識することである。

意識は、私たちが形の外見を超えて進ませるが、人格をすべての知識の自動的な保持者に変えるわけではない。

臨在の中にいることが、私たちが誤りを犯し得ない者にすると思ひ込むことは、自我による新たな横領となるだろう。

それは、人格が再び王座に就こうと試み、今度は意識と真実の主人であると自称することになるだろう。

意識は啓示の場を開く。

言葉は啓示する。

識別は対応を觀照する。

そして、私たちが受け取ったものが本当に生命に仕えるものであるかどうかを、実が明らかにする。

それゆえ、啓示されたと言われるすべての真実は、觀照され得るものでなければならない：

それは誰に仕えるのか？

それはどのような実を結ぶのか？

それは開くのか、閉じ込めるのか？

それは結ぶのか、分かつのか？

それは解放するのか、支配するのか？

意識は、真実を所有していると宣言する必要はない。

それは対応によってそれを認識する。

意識の回復

臨在は、あなたが以前に所有していなかった意識をあなたに与えるのではない。

それは、人格がそれを認識できなかった時でさえ、すでにあなたの存在を可能にしていた意識を啓示する。

あなたが臨在の中にいない時、意識はあなたの人格の中に含まれているように見える。

あなたが臨在に入る時、あなたの人格が意識の中に含まれていることが啓示される。

これがすべての違いである。

分離した意識は言う：

「私は意識を持っている」。

臨在は啓示する：

「私は意識の中に在る」。

そして、その「私」でさえもそれを横領しようとするのをやめる時、認識が残る：

私は意識を所有していない。

意識が私を含んでいる。

私はその起源ではない。

私は、言葉が観照され、記憶され、具現化され得る生きた形である。

内なる対話

臨在の中において、人格が自分を意識の主人であると信じるのをやめ、自分がその中に含まれていると認識する時、言葉は内なる対話を通じて啓示され得るのである。

しかし、私たちはこれを明確に理解しなければならない：私たちの内に現れるすべての思考が言葉の言葉であるわけではない。沈黙は、人格を自動的に無謬にするわけではない。

内側においても、警告に偽装された恐れ、啓示に偽装された欲望、使命に偽装された誇りが現れ得る。

それゆえ、すべての内なる応答は、その実によって識別されなければならない。

その言葉は、兄弟たちの上に人格を大きく見せるものか？

それは盲目的な服従を要求するか？

それは恐れや分離を養うか？

それはあなたを真実の排他的な主人であると宣言するか？

それはあなたが他者の苦しみを無視することを許すか？

その場合、たとえ神聖な言葉を用いても、まだ自我が語っているのである。

言葉の言葉は不快にさせ、剣のように貫くことがあり得るが、真実を支配の道具に変えることはない。その実は、意識、責任、正義、慈愛、自由、そして統一である。

自我が中心でなくなるとき、内なる対話の問いも変わる。

私たちはもはや単に問わない：

私は何を得るのか？

私はどう身を守るのか？

私はどう打ち勝つのか？

私はどう認められるのか？

私たちは問い始める：

真実とは何か？

生命に仕えるものは何か？

統一を回復するものは何か？

この状況の前に、私は何を具現化すべきか？

どの言葉が、他者を兄弟として認識することを可能にするのか？

この新たな中心から、私たちは御国への帰路を記憶し始めることができる。

臨在の第一の真実

私たちが真に臨在に入る時、最初に啓示される真実は、私たちが何者であるかという問いへの答えを見出すために、いかなる外なる場所に赴く必要もないということである。

内なる神殿が忘れてしまったものを包含できる外なる神殿は存在しない。

記憶を置き換えることができる書物は存在しない。

私たちに代わって認識できる師は存在しない。

私たちの代わりに内なる道を歩むことができる導き手は存在しない。

神殿は私たちを集めることができる。

書物は私たちに象徴を渡すことができる。

師は指し示すことができる。

導き手は伴走することができる。

しかし、認識はあなたの中で生じなければならない。

これらの言葉でさえ、もしそれらにあなたが依存するようになるなら、その目的を果たせないだろう。この祭壇は、あなたの意識を置き換えるために築かれたのではなく、あなたをそれへと返すために築かれたのである。

臨在において、問いと答えは、もはや二つの分離した実在ではなくなる。

問いは、意識がまだ理解していない何かを観照する、目に見える動きである。答えは、そ

れが人格の利害からではなく、言葉から観照される時に啓示される、目に見えない起源である。

問いと答えは、同じ一つの啓示の行為の二つの部分である。

それらは形において同一ではないが、同じ一つの起源から発する。

同様に、観照する者と観照されるものは、形において区別できるが、起源において分離してはいない。

問いが、何か目に見えるものの観照から生まれ、臨在から発せられる時、その真実は言葉の見えざるものの中に啓示され得る。

外側に形が現れる。

内側にその起源が啓示される。

象徴は両者の間の橋である。

それゆえ、臨在において、外側と内側は、互に通じ合わない世界として経験されることをやめる。それらは混同されず、その違いが消えることもない：それらは対応に入るのである。

分離は起源には存在しない。

それは、人格が学んできた見方の中に存在する。

狭い門

なぜ御国への門は狭いのか？

なぜなら、私たちが自分自身と混同してきたすべてのものを携えて、その門をくぐることはできないからである。

狭さは気まぐれによるものではなく、御国が私たちを排除しようとするからでもない。それは対応によるのである。

鍵が扉を開くのは、その形が錠前に対応するからである。力によってではなく、対応によって開くのである。

同様に、私たちは自分の人物像を押し付けたり、功績を積み重ねたり、言葉の所有者であると宣言したりすることによって御国に入るのではない。私たちが入るのは、私たちのあるところのものが、御国のあるところのものと対応するときである。

分離は、分離であることをやめない限り、一体へ入ることはできない。

偽りは、暴かれない限り、言葉に入ることはできない。

支配への欲望は、王座を放棄しない限り、御国に入ることはできない。

だからこそ門は狭いのである。本質のみがそれを通過できるのである。

人物像は破壊される必要はないが、王として入ることはできない。それは身をかがめ、中心を放棄し、言葉に仕える者とならねばならない。

入るためには、まずあなたが混同していたものから空にならねばならない。

その後、あなたは臨在のうちに留まらねばならない。

臨在のうちに、あなたは思い出す。

思い出すとき、あなたは知る。

あなたの内に思い出されたものを認識するとき、あなたはある。

借り物のあらゆる同一性を超えてあなたが自らを見出すとき、あなたは所有することなく宣言する：

私は在る。

そして、あなたが認識したものが言葉となり、決断となり、業となると、言葉は再び形において受肉する。

そのとき、道は完成する：

あなたは空になる。

臨在に入る。

思い出す。

認識する。

自らを見出す。

そして受肉する。

あなたは遠い場所に到達する者のように御国に戻るのではない。

御国は、あなたが、それが決してあなたから分離していなかったことを認識するのを妨げていたものを支えるのをやめるときに現れるのである。

私たちが教えられた世界

御前にて、私たちは真実として示された世界を記憶とともに観察します。

□ 私たちは生まれた時から、すでに解釈された世界を提示される。

□ 私たちは名前、国境、信念、習慣、階層、

□ 成功のモデル、交換の形、そして互いを理解する方法を受け取る。

□ 世代から世代へと、私たちはその世界を受け継ぎ、

□ それに参加し、またそれを伝えてきた。

□ その連鎖は、私たちがその世界全体を吟味せずに受け入れるときに現れる。

□ 思い出すことは、繰り返しを中断することでもある。

□ □ □ 啓示の過程にて □ □ □ 執筆中。